のキャリアと、英国、プロシア、ロシア、スペインの諸王家にわたる九人の血友病患者の生涯を、とくに患者と母親であるキャリアとの関係に注意しながら述べた。

日本医史学会関西支部昭和六一年春季大会

共催／京都医学史研究会

とき　昭和六一年五月二五日（日）午前一〇時から

ところ　京都市左京区吉田河原町一五―九

京大会館二階（電話〇七五―七五一―八三一一）

プログラム

一　般　演　題

一、芥子と罌粟考　宗田　一（京都市）

二、産科医の墓と民間信仰　森　納（鳥取県）

三、山脇東洋と若狭　杉立　義一（京都市）

四、胎教説の進展　赤堀　昭（小太郎漢方製薬）

五、京都医家・本草家と津藩の関係――平松楽斎日記を中心として　茅原　弘（津　市）

六、京都の医史に関する二軸――沢庵宗彭筆「神農像」、馬東筆「達磨像」　岩治　勇一（大野市）

追悼講演

中野操博士を偲んで　大阪大学名誉教授　藤野恒三郎

特別講演

針灸の起源について　京大人文科学研究所教授　山田　慶児

七、京都駆黴院の変遷　永利　満雄（洛東病院）

八、宇都宮徠（さたる）と私立起廃病院（大分）　佐久間温巳（西尾市民病院）

九、飯田攪隠について

是成　太一（財団法人飯田攪隠遺徳顕彰会）

一〇、疫痢について　安井　宏（愛知県）

一一、三廼俊一先生の黒川良安伝　寺畑　喜朔（金沢医大）

一二、上州原沢文仲文書中にみられた坪井塾門人録断簡　蒲原　宏（新潟市）

一三、ボードイン指導：慶応元年長崎病院の入院カルテ（9症例）　石田　純郎（三菱水島病院）

一四、横浜仏語伝習所、太田陣屋、修文館の相互関係について　中西　淳朗（横浜市）

一五、日本の近代麻酔学の発展を顧みる　藤田　俊夫（京都市）

一六、男子生殖巣をあらわす語の歴史的変遷：とくに睾丸（えきがん）と睾丸（こうがん）の混同について　友吉　唯夫（滋賀医大泌尿器科）

一七、吉田顕三のこと（第5報）——中野操先生に捧ぐ　丸山　博（箕面市）

〔書　評〕

鈴木明子著『日本における作業療法教育の歴史』

この本の標題だけ見ると随分特殊な狭い範囲を扱ったものの様な印象を受けるかも知れないが、決してそうではない。著者の略歴を紹介すると、先ず北海道大学教育学部を卒業し、その後アメリカ、コロンビア大学医学部に学んで作業療法士（OT）となり、帰国後日本で最初の OT として公認された。それは「理学療法士及び作業療法士法」（昭和四〇年）が制定される以前であった。以後日本の OT 教育を推進して来られたが、最近再度アメリカへ留学し、ミシガン州立ウェイン大学大学院で学位論文を書いて Ph. D. となった。その際の論文を基としてできたのがこの本である。これは作業療法教育の狭い技術論を述べるのではなく、まさに Ph. D. の学位にふさわしく、作業療法の哲学的基盤を探って、日本と欧米の思想的背景の差異まで掘り下げて考察を加えている。

本書の冒頭の文章で表紙カバーにも印刷されている次の一節を読めば、著者の訴えようとする事が大体推察できるであろう。

「作業療法は、より健全な心と身体を求める人間の自然な欲求、希望と努力の現れたものである。古代ギリシャから今日まで続いて来た理念であり治療方法である。人権尊重の高まりが大きな波として一国、一地方を包むとき、作業療法が表面化して突出した先駆者の業績が浮び上がるのである。この人々の努力はどこか別の国に飛び火し、次の先駆者の心を燃やして歴史の流れの中でつながって来たのである。」